

が現はれてゐるのである。出來事がかつてありしがまゝに模寫すると信ずる歴史の實在論も、又實在とは即ち實在の認識に外ならずとする觀念論も、生が歴史と云ふ精神的形式を帶ぶるに際し、等しく事實を曲ぐるものなる事が明になる、前者は内容を失ひ、後者は連續を失ふからである。しかし余は、一方體驗されたる生と、他方我々が歴史と名づくるその改作との間に横はる問題に對して、次の如き希望を掛けたいと思ふ、即ち之の兩者の齟齬は恐らく最高裁判所の認識論上の判決であつて、決して形而上學上の判決ではあり得ない、何故かならば、一見生と對立せりとも見ゆる歴史が終結に於ては、實は生の、正に同一の生の、顯現であり所業であるからである。けだし生の對立 Gegenüber-vom-Leben は生の一つの形式だからである。

歴史實在論のもつ意味は、歴史が如實に寫し出す生の内容に存するのではなく、歴史の避けがたき

生との分離 Anders-Sein-als-das-Leben が、この生自身の法則、即ち衝動的なる力から生ぜざるを得ないと云ふ點に存するのである。

景 報

哲學會例會

四月廿日(月)午後六時より、第十教室に於て

東北大學教授ヘリケル氏の

Ausätze zur Metaphysik in der gegenwärtigen deutschen Philosophie

なる講演を聞く。教授は現代に於ける二つのカントの復興、即ちマールブルヒ學派と西南學派とより論を進め、前者が主としてカント・第一批判書中 *Deduktion* に重きを置き、従つてその哲學が *transzendente Logik* をなり終つて認識論以外の他の問題には充分に接觸し得ず、且つてその方向に走れば最近のナトルプの如くカール、ゲルテ等によつてむしろ神祕主義の暗黒に落入るの恐ろしさに反し、後者は、特にリツケルトに於ては、カントの *Die Ethik* の問題より出發するが故に認識論以外の問題にも立入る事を得て、廣汎なる *Werthphilosophie* を建設し得た。しかしリツケルトに於てはカントの *Faktum der Vernunft* の如きものは單に *Sollen* の世界に於てのみ解するが故に、我々の形而上學的要求は満足せられない。と云つて現代の哲學はすなへてを理化し、形而上化するへいゲルの汎理論を追ふ譯にも行かない。この時に、現實の世界と形而上の世界とをそれの範疇によつて立し來るラスクの試みは充分に注目し價する。しかしながら、單に對象を愛動的に受取るを見る模寫説は、形而上の世界に對しても、カント以後に於ては許し難い。まして單なる *Schauen* や *Erlernen* をなす *Veranschaulichung* の試みは未だ純なる *Philosophieren* ではない。このに於て新なる *Subjektive Metaphysik* が要求せられる事なる。かくて教授は新形而上學の提唱を以つて講演を結ばれた。岩井、本部横上にて茶話會を開く。西田教授、波多野教授、和辻、岩井、兩講師、其他多數の來會者あり、盛會なりき。